

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 川口 裕司



学位申請者 菅井 健太

論文名 ブルガリア語ブラネシュティ方言における補語の接語重複  
－言語接触と文法化－

## 【審査結果】

菅井健太氏から提出された博士学位請求論文「ブルガリア語ブラネシュティ方言における補語の接語重複－言語接触と文法化－」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は同氏に博士(学術)の学位を授与することが適当であると全員一致で判断した。

最終試験は2018年3月24日14:00~16:15、公開で実施された。最初に菅井氏より提出論文の概要説明があり、その後、各審査委員から菅井氏に対して質問、助言、講評がなされ、最後に主査から講評の総括が行われた。

審査委員会は川口裕司(本学教授)を主査とし、風間伸次郎(本学教授)、匹田剛(本学教授)の他、学外から鈴木信五(東京音楽大学教授)、三谷恵子(東京大学教授)の両先生をお迎えして5名から構成された。

## 【論文の概要】

本論文は、ルーマニア領内で話されるブルガリア語ブラネシュティ方言にみられ、バルカニズムとして古くから注目されている、同一文構造中で同一指示の接語形代名詞によって補語を二重に表示する補語の接語重複の現象に対して、本人が現地で繰り返し行った調査に基づいて形式的小および語用論的な記述を行い、さらにその現象を言語接触と文法化の観点から分析を試みた研究である。

本論文の構成は「0. 本論文の構成」で全体の構成を示した後は、以下の通りとなっている。：

1. はじめに
2. 補語の接語重複
3. ブラネシュティ方言と補語の接語重複
4. 接語重複と文法化

## 5. おわりに

### 参考文献

このうち、3章と4章が本論文の議論の中核をなす部分である。またこれらの他に、菅井氏自身の現地調査により収集し書き起こしたブラネシュティ方言の接語重複が起こっている文例を集めた言語資料が参考資料として添付されている。

第1章「はじめに」では、研究へのイントロダクションとして、研究の対象、背景、目的、意義、方法などについて記した上で、いくつかの用語・表記・略語などを整理し、さらには本論文での議論の前提知識となるブルガリア語とその方言区分などの情報を提示している。

第2章「補語の接語重複」では、ブラネシュティ方言における補語の接語重複について議論するための背景として重要な、標準ブルガリア語における補語の接語重複の特徴を概観している。本研究で議論される接語重複とは「同一文構造中における接語形代名詞による動詞項の二重化」と定義され、以下の様に補語( $N_i$ )と同一指示の人称代名詞接語形( $Ncl_i$ )が同時に見られる現象のことである：

V       $Ncl_i$      $N_i$

その上で、本章では、接語の一般的特徴、人称代名詞接語形と非接語形の形態法や語順、接語重複の概要、補語以外の接語重複、接語重複の義務性、語順と格標示、定性と特定性、トピック性、接語重複構造の統語的特徴などが先行研究と自身の調査結果に基づき概説されている。

第3章で「ブラネシュティ方言と補語の接語重複」では、ブラネシュティ方言の接語重複の形式と機能の特徴について、菅井氏自身の調査によるデータに基づいた記述と分析が展開される。

まず 3.1. 「ブラネシュティと方言」では、ルーマニア領内にあるブラネシュティという集落の位置及びその住民のブルガリアからの移住の歴史、そして現在のブルガリア語ブラネシュティ方言の話者の状況などが概説され、さらに菅井氏によるフィールド調査の概要、ブラネシュティ方言の文法、音声、語彙の特徴が概説され、さらに同方言がブルガリア語のグレーベン方言シリストラ変種に属するものであることが述べられている。

続いて 3.2. 「補語の接語重複の構造」ではブラネシュティ方言の補語の接語重複の主として形式的全体像を標準ブルガリア語やルーマニア語と対照しながら概説し、その特徴を明らかにしている。その中で 3.2.1. 「人称代名詞接語形」では、ブラネシュティ方言の人称代名詞接語形は多くの点で標準ブルガリア語のそれと同じ特徴を示すものの、標準語とは異なる特徴も示していることが見出されている。それは、接語形が文中での語順に関係なく動詞に対して前置される、ということである。ただし、命令形の場合はそうならない。このことは、文中での位置によって接語形の語順が規定される標準ブルガリア語と異なり、

ブラネシュティ方言では動詞の形態的特徴が接語形の語順を規定していることを意味する。また、所有者を示す接語形与格は、標準ブルガリア語と比較して語順に関して多くのバリエーションを許容する傾向にある。そして、その多くがルーマニア語と共通しているという事実はルーマニア語の影響による言語変化を示唆しているとしている。続く 3.2.2. 「前置詞 *пъ/pǎ*」ではルーマニア語から借用された対格標示のための前置詞 *пъ/pǎ* の基本的特徴を記述し、分析している。それによると、直接補語の接語重複は *пъ/pǎ* を伴う場合と伴わない場合で異なった振る舞いを示し、*пъ/pǎ* を伴わない場合の直接補語の接語重複は標準語を含めたブルガリア国内の諸方言と同じ特徴を示し、伴う場合は異なる特徴を示すことを示した。即ち、先行研究によると一般的に接語重複は動詞後にある補語よりも、動詞前にある補語に行われることが多いが、ブラネシュティ方言では *пъ/pǎ* なしの補語では同様の傾向を示すものの、*пъ/pǎ* ありの場合はその傾向が見られない。さらに 3.2.3. 「文法化重複」ではブラネシュティ方言でも標準語と同様に身体・心理的な感覚や状態を表す述語などが関与する場合に接語重複が文法的に義務づけられた文法化重複が起こっていることを示し、また、前節の *пъ/pǎ* を伴う直接補語の接語重複は「ほとんど義務的」で、文法化重複に近いものであるとした。さらに、3.2.4. 「動詞前」と 3.2.5. 「動詞後」ではブラネシュティ方言の接語重複の構造上の特徴を記述し、標準ブルガリア語と比較している。それによれば、補語が動詞前に置かれている場合でも動詞後に置かれている場合でも、多くの点でブラネシュティ方言の接語重複は標準ブルガリア語と同様の特徴を示しているが、3.2.2. で論じた前置詞 *пъ/pǎ* を伴う接語重複だけが標準ブルガリア語と異なる独特の特徴と見えることを見た。

3.3. 「補語の接語重複の機能」では、ブラネシュティ方言の補語の接語重複の機能について分析している。それによると、標準語と同様、ブラネシュティ方言の接語重複も基本的にトピック表示という機能を持っていることが確認できたが、一方でフォーカスである補語の接語重複など、元来の機能から外れた補語の接語重複も見られた。このことは、ブラネシュティ方言の補語の接語重複では語用論的有標性が失われ、文法化が拡大する方向に進んでいることを示唆している、と論じている。

第4章「接語重複と文法化」では、ブラネシュティ方言の接語重複を文法化の観点から分析している。

4.1. 「文法化」では、先行研究の理論を概観した後、補語の接語重複についての振る舞いが異なる標準ブルガリア語と標準マケドニア語を比べ、前者よりも後者の方がより文法化が進んでいることを概観した。その上で、マケドニア(南西)からブルガリア(北東)へと連なる方言の連続体において、南西ほど接語重複の文法化の程度が高く、北東ほど低いことを概観し、ブラネシュティ方言の起源となっているブルガリア語北東方言(ミジャ方言群)は接語重複の文法化の程度が低く、語用論的な手段にとどまっていることを指摘した。

4.2.「言語接触と文法化」ではブラネシュティ方言の補語の接語重複を言語接触と文法化の観点から考察している。ブラネシュティ方言の基盤となっているブルガリア語ミジャ方言群と比べて、ブラネシュティ方言では補語の接語重複が比較的頻繁に用いられ、一定の場合には義務的すらある。注目すべきはその義務的な接語重複がルーマニア語からの借用語である前置詞 *пъ/pă* を伴う補語の場合である、ということである。また、ルーマニア語において当該の前置詞を伴う直接補語は義務的に接語重複を起こす。このことから、ブラネシュティ方言の補語の接語重複のうち、*пъ/pă* を伴ったものは、ルーマニア語との言語接触の結果、ルーマニア語の *pe* を伴う補語の接語重複をモデルとした文法複製が行われ、語用論的に制限的な使用パターンからより広範なコンテクストに適用される使用パターンへと変化し、文法化が促進されたものと結論づけた。ただし、文法化はあくまでも段階的に進行するもので、いわば程度の問題である。そこで4.3.「ブラネシュティ方言の接語重複の文法化」では、先行研究が「文法化のパラメーター」として提案する「拡張」、「脱意味化」、「脱カテゴリー化」、「浸食」の4点をどれだけ満たすかを補語のタイプに着目しながら具体的に検討している。その結果、ブラネシュティ方言の補語の接語重複はかなりの程度文法化しているが、直接補語がどのような名詞句によって表されるかによっても文法化の程度が異なる、と指摘している。ブラネシュティ方言の接語重複のうち最も文法化の程度が高いのは、*пъ/pă* を伴う人称代名詞非接語形対格の場合で、コンテクストの制限が全く無い。それに対して *пъ/pă* を伴うその他の名詞句は文法化の程度が人称代名詞非接語形より低く語用論的要因の関与が部分的にだけ見られる。さらに *пъ/pă* を伴わない名詞句は完全に語用論的な手段にとどまっており、文法化の程度が最も低い。以上の考察から、ルーマニア語から借用した前置詞 *пъ/pă* を伴う場合に限って補語の接語重複の文法化が進んでいるのは、同現象の文法化がルーマニア語との言語接触によってもたらされたと考えられることで説明できると結論づけている。

最後に第5章「おわりに」で、ブラネシュティ方言の補語の接語重複はルーマニア語との言語接触、とりわけ前置詞 *pe* の借用の過程で補語の接語重複の文法化が促進されたと結論づけている。

#### 【審査の概要と評価】

菅井氏のこれまでの研究の集大成と言うべき本論文は、これまでも存在は指摘されていたもののあまり研究が成されてこなかった、ブルガリア語ブラネシュティ方言の接語重複と言う現象に関して、おそらく世界で始めて体系的かつ緻密に研究したものである。

本論文に対して審査委員からは、高く評価される点として以下の各点が指摘された：

1. ブラネシュティ方言という危機言語の研究であり、既に母語話者が高齢者に限られ

ている言語の記述と分析は言語学的に価値があるのはもちろんであるが、現地の話者にとっても大きな価値がある。

2. そもそもブルガリア語の接語重複の研究は歴史が浅く、ブラネシュティ方言やその他のルーマニア領内のブルガリア語で当該現象の存在は指摘されていたものの、網羅的で精密な記述・研究は成されていなかった。そこに取り組んだこと自体に価値がある。
3. 菅井氏がこれまで4回にわたって行ってきた現地でのフィールド調査によって収集したデータは高く評価できる。とくに今回「参考資料」として添付された菅井氏の調査によって収集されたブラネシュティ方言の接語重複が見られる用例集は資料として高い価値がある。
4. ブラネシュティ方言の接語重複という現象を言語接触と類型論という2つの観点から考察した議論は興味深い。とくに、ブラネシュティ方言がルーマニア語からの前置詞 *пъ/pă* の借用に伴う文法複製によって接語重複の文法化がより進んだことを論証するための、自ら収集した記述データに基づく多角的で緻密な議論は高く評価できる。

一方で次の様な問題点や今後の研究への提言が示された：

1. 外形的な面で誤植や表現の不備などが若干見られた。また、概念の定義が曖昧で時にトートロジーになっている箇所なども見られた。とくに「トピック」という概念が曖昧で、かつ様々な意味で用いられていることは複数の審査委員から指摘があった。
2. 収集したデータの分析に不安がある箇所が散見された。また、ブルガリア語だけでなくルーマニア語の現況に関しても、必ずしも実態を正しく反映しているとは言えない記述が見られた。
3. 今後はより多くの類型論の理論を参照し、時に自らのデータによって先行研究を批判的に評価することも必要である。また、個別言語的にも通言語的にも残された問題は多いので、言語のより多くの側面に目を向けて研究を発展させて欲しい。
4. フィールド調査によって収集した言語資料は貴重である。今回は接語重複に関わる部分を資料として形にしたのみだが、できるだけ全てを形にし、ルーマニア語の訳もつけた上で、現地に還元することも考えるべき。

外形的側面と今後の課題を中心に指摘された以上の各点は、いずれも本研究の価値を高く評価した上でのものであり、多くは今後の発展を期待する建設的な提言・要望である。

また質疑において、菅井氏の応答は的確であり、研究の問題点についても多くは既に自覚していることが見て取れた。さらに、今後の研究の方向性や発展の可能性についても具体的なビジョンを持ち、本研究を発展させて行く強い意思も感じられた。

審査の最後には主査から本論文が本学博士学位論文評価基準の各点をいずれも満たしていることが確認された。

以上、本審査委員会は、論文の内容及び最終試験での質疑応答に基づき総合的に検討した結果、菅井健太氏の学位請求論文「ブルガリア語ブラネシュティ方言における補語の接語重複－言語接触と文法化－」が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいと全員一致で判断した。